

なぜ後援会が必要なのか

園長 児嶋 草次郎

5月4日はみどりの日。今まであまり意識したこともないけど、あたりを見渡すと緑一色。朝日新聞では、「若葉がまぶしい季節」と社説で書き始めていました。1年の中で一番大自然の生命力を感じさせられる季節かもしれません。これ以上繁茂すると互いの生存領域を守るための戦いに転じますが、雑草1本1本が美しく感じられるシーズンでもあります。朝の散歩の途中、ルビー色の野イチゴを食べたり、朝露でツヤツヤのやわらかな葉や草に触れるのが楽しみです。5月4日の夕方には1ℓの容器いっぱいになるほど野イチゴを収穫できました。

毎年同じ体験を重ねながら齢を取って来ているように感じますが、5年10年という単位で振りかえると、地球温暖化を実感しないわけにはいきません。

春が短くなったのか、夏が長くなったのか。秋の花であったサルビアやマリーゴールドが、春のキンセンカと一緒に咲くような庭の風景が見られるようになって来ているのです。冬もあたたかくなったせいか、石垣の間等に咲くサルビアが霜にやられず生き残るようになりました。10年前ではあり得なかったことです。また、マリーゴールドの咲き終わった茎を庭の片隅に捨てておくと、そのこぼれ種が早くから芽を出し、もう蕾をつけ始めているのです。

今、ハウスで苗を育てる時代ですので、花々の季節感は薄れていますが、露地でもそんな状況が生まれてきています。今年は、春の苗作り（キンセンカ、ノースポール等）がうまくいきませんでしたので、自主的に芽を出してくれたマリーゴールドを、せっせと花壇に植えています。また、野生化したメランポジウムが芽を出す時期でもあるので、花壇周辺の地表をむき出すための草刈も始めています。5月から晩秋霜が下りるまで、次々に咲き続けてくれるカンナも、元気に成長し花を咲かせ始めています。一方畑も忙しくなります。さあ、大自然との共生（一部戦い）の季節の始まりです。この1年、またがんばります。

さて、今回は、「なぜ後援会が必要なのか」という題で書かせていただきます。4月20日、石井記念友愛社後援会「石井十次の会」総会で20分ほど話させていただいたことを、構成し直して書かせていただきます。

オーストラリアで昨年11月、国会が16歳未満の子供たちのSNS利用を禁止する法案を可決したというニュースは、多くの方が知っておられると思います。世界の子供たちがSNSに汚染される状況の中で、画期的な出来事でした。日本でもSNSを使った闇バイト、カジノ等に手を染めたり、大人の性の闇に引きずりこまれたりする少年・少女たちが多く出て来ています。我が子がそれらの誘惑にコントロールできなくなって、昼夜逆転したり不登校になったり、犯罪にまきこまれたりして、頭を悩ませている親御さんも多くおられることと思います。多くの人々が「これはまずい」と感じながらも、世の流れに抗することができないというのが現実なのでしょう。中学生・高校生のほとんどがスマートフォンを所持するという時代です。

児童養護施設においても、もうほとんどの施設が所持させているようですが、友愛園ではまだ認め

ていません。理由は、その誘惑に流されてしまったことが入所の大きな理由になっているケースがあること、それに、それがなくてもりっぱに生活ができること等です。検討委員会は設けていますが、現段階では、デメリットの方がメリットを上回るということでしょう。これで良いとは思いませんが、国民の期待に答えるためにも、表面的な流れに簡単に乗ってはならないとも思います。

話をもどします。3月23日（日）の朝日新聞で、「子どもとSNS」という見出しでオーストラリアの「16歳未満のSNSの利用禁止」について取りあげていました。

その中に興味深いことが書いてあります。「SNSは、多感な時期の子供が感じる大きな不安や脆弱（せいじゃく）性を増幅させる。健全な成長のため、年齢制限が必要だ」と、キャンペーン団体が昨年5月に発足し、特に保護者の母親たちが中心になって署名活動をしたということです。そして半年で約12万74筆が集り、国に訴えたとのこと。4月20日のNHKスペシャル「オンラインカジノ 人間操作の正体」では、ギャンブル依存症でイギリスでは毎年300人以上が自殺するとか、その元事業主が告白していました。各国で、深刻な問題となっているのでしょう。人間の欲望には限りがなく、まだ自律力の未熟な子供たちが無防備な状態に置かれ、食べ物になっているのです。子供の最善の利益とは、大人と同じような欲望の世界にさらすということではないはず。です。

話がどんどん脱線していかないようにともどします。私がここで注目したいのは「署名活動」です。12万7千筆の署名が国を動かしたという事実です。国や行政がやるのがすべて正しいとは限りません。特に時代の過渡期においては、リーダーたちが判断をあやまる場合もあるでしょう。そういう時は、在野の人たちが立ち上がらねばなりません。吉田松陰風に言うならば、草莽崛起（そうもうくつき）です。民主主義社会においては、この署名活動が重要な世直しの手段となります。

ここから話が本題に入っていきます。「なぜ後援会が必要なのか」です。私たちは、2019年に、全国の児童養護施設に少しでも関りのある方々に向けて署名活動を行ないました。結果的には約43000筆の署名が集まりましたが、約600施設、生活する子供たちは2万人ちょっとの世界ですから、決して少ないとは言えないと思います。

2017年に厚労省より出された「新しい社会的養育ビジョン」の中に、乳幼児の施設への措置停止とか児童養護施設への入所制限（1年以内）等が明記されており、その言葉の撤回を求めるものでした。ちょうどグローバリゼーション真っ盛りで、アメリカナイズされた政治家や学者たちによって、社会的養護の世界標準化へ向けての言わば革命でした。私たちは、直感的に、これは日本の先人たちの築きあげて来た養育文化を崩壊させると考え行動したのです。その行動が正しかったのか否かは歴史が判断するのですが、私たちは、間違っていたとは考えていません。

もし、後援会がなかったら、この署名活動は実現したのでしょうか。また、4万人以上の署名を集めることができたのでしょうか。否です。これははっきり言えることです。

私たちは社会福祉法人という組織に属していますが、その活動資金のほぼすべては、国や行政からの補助金に頼っています。行政側から言えば、私たちがどうあがいてみても、出先機関の一つにすぎないでしょう。「勝手なこと」をすれば、すぐに行政指導が入ります。署名活動はどうか。

後援会の皆様が主体的に動いてくださったのです。一方全国の児童養護施設へ向けても協力依頼を出しましたが、あまり反応はよくありませんでした。私たち児童養護施設の組織母体もほぼ無視でした。

石井十次は在野の人でした。まだ福祉という言葉さえない時代に、全国1万人の賛助会員（後援会員）に支えられながら、しいたげられた子供たちの未来づくりに挑戦し続けたのです。岡山から400K離れたこの宮崎へ帰って来たのも、その教育を未来につなげるためです。私たちは、その伝統と文

化を引き継ぐものとしての誇りとプライドを持ってこの仕事をさせていただいています。決して出先機関として甘んじてはいません。

だから、いざとなった時、それは子供たちの未来を奪うような政策を国が取ろうとする時には、立ちあがらねばならないと思っています。その時には、後援会「石井十次の会」の皆さんに御支援をお願いしなければならないのです。そういう意味では、私は常に緊張感を持って仕事をしています。民間の社会福祉法人であるのなら、本来、行政との間にそういう緊張関係は持ち続けなければならないのではないのでしょうか。

今年は、石井十次生誕 160 周年です。石井十次の草莽崛起の精神を、もう一度かみしめなおしたいと思います。私たちは石井十次の精神の具現化をめざしているのです。

この春、一人の卒園生が宮崎県の教員採用試験に合格し、小学校の先生として赴任しました。3歳で施設に入所してから、18歳で高校を卒業するまで15年間施設で生活したことになります。あの「ビジョン」が発表されて以降、行政は、施設での15年間を否定的に見ます。「家庭優先の原則」だからです。崩壊した家庭でも「家庭優先の原則」とはどういうことか。

学力だけで教師になれるわけではありません。施設の保育士や指導員になれるわけでもありません。一番重要なことは、「価値観の転換」です。人の上に立つことのできる人間の資質とは、未来指向の生活設計が立てられるようになることです。そのためには、生活習慣を確立し、しっかりプラス思考で自己コントロールができるようになることでしょう。

虐待を受けて人間不信におちいり、洗面や入浴の習慣も身につかず、日々の誘惑に流されていたそれまでの価値観からは、180度変えなければならないのです。それまでの生活から、ほんとうに脱却しようとするのであれば、施設生活はなまやさしいものではありません。なまやさしいものにしていたら、子供たちは立ち直ることはできません。

子供たちは、5年6年とかけて、まず職員たちに同一化していき、自然にその価値観を自分のものとしていくのです。おそらく、そのことを自覚できている子は少ないでしょう。すべての子がそれに成功するわけではありませんが、社会に出て色んな世界で貢献できている子供たちは、皆その過程を通して来ています。そういう意味では、児童養護施設は重要な人材養成施設です。

「石井十次の会」の皆様の存在は、子供たちの成長にとっても必要です。児童養護施設は国の支援によって成り立っていますが、その支援とは非常に抽象的で、その対象者を子供たちはイメージすることはできません。しかし、後援会の人たちが施設に出入りするようになると、「ああ、この人たちが自分たちの生活を支えてくださっているのだ」と実感できるのです。実感できれば、感謝の気持ちも生まれますし、期待・信頼に答えようとする心も育ちます。

今春には、4名の高卒生が大学・短大に進学しました。友愛園のこの10年間の大学等への進学率は平均58%です。先生になったり社会福祉士を取ったりすることは、彼らにとって、そう困難なことではなくなって来ています。先輩の後姿を追うことで志も育ちます。人間は志を持つことで、持って生まれた能力以上の力を発揮することを、子供たちは証明してくれています。私は密かに彼らのことを「友愛バンド」と呼んでいます。おそらく、これから世の中を良い方向に変えるような子も出て来るでしょう。

「石井十次の会」からは、大学生たちに月2万の返済不要の奨学金も支給してくださっていますが、これも大きな鼓舞激励となります。これからは施設で生活することが、子供たちにとって立志、チャンス、親への感謝を獲得することになるような道を作っていかなければならないと思います。今後も御支援のほどよろしくお願い致します。

以上が、本来話したかったことです。石井記念友愛社後援会「石井十次の会」は、1200 ほどの個人・団体会員で成り立っていますが、世代交代が徐々に進んで来ており、また、都城・宮崎・西諸と支部ごとの活動も盛んになってきています。そして、この度は本家本元の高鍋・木城支部も発足しました。年会費 3000 円のボランティア団体ですので、それぞれの価値観、思いがあり、すんなりとは事がすまない面もありますが、この支援の和・輪・環は、私たちにとっては心強いものです。

おそらく今後、グローバル化と反グローバル化とが対立し合う世界となり、それぞれの地域・家族が、その混迷の中で目標を見失って崩壊していくのだらうと思います。行政やマスコミの指し示す方向と現実との間に乖離（かいり）が生まれて来ているのではないかと感じることも出て来ています。私たちは子供・家族・地域を守るために、時には「石井十次の会」の人たちと「草莽崛起」しなければならないのだと覚悟しています。